地理教材としての地形圖(三)

三、大阪近傍

前號には舊都の解說を試みたが、之に尋いで日本の大都市たる大阪を俎上にのぼせたいと思ふ。大阪市及び其の周圍を含む陸地測量部出版地形圖には縮尺の大小に依つて左の五種類がある。

一萬分一大阪近傍、藍黑の二色刷で總計二十一枚中十五枚だけが昨年十月初めて發行された極めて新しい地圖である。既刊の圖葉を擧げると、大阪東北部二號、大阪東部三號、大阪東南部四號、平野鄕五號、大阪北部七號、大阪首部八號、大阪南部九號、住吉十號、堺東部十一號、尼崎東部十三號、大阪西部十四號、大阪西南部十五號、柴谷十六號、堺西部十七號、大阪港二十一號であるが、大阪市の大部は以上の三號、四號、七號、八號、九號、十四號及び十五號の七圖葉中に含まれてゐる。

二萬分一大阪近傍、二十四枚中吹田、大阪東北部、大阪東南部、金田、伊丹、大阪西北部、大阪西南部、堺の八圖

五萬分一京都及大阪東北部、大阪東南部、大阪西北部、大阪西南の四圖

都市近郊圖五萬分一大阪近郊一枚

二十萬分一帝國圖「京都及大阪」一枚

此の外二萬五千分一大阪近傍は出版されるものであるが現在では岸和田が一枚發賣されてゐるに過ぎぬ。

此の大阪四近の地貌は平野及び邱陵を主として山地としては東方の生駒山連と北方の南部西山の南邊がある許りで日本に於ては低く打開いたことに於て著しき地方である。從つて地質は

新生代の洪積層と冲積層とより成る部分が廣くて古期の岩類は東方に地壘を成す生駒山連や高槻池田間の西國街道以北の山地を構成して居るに過ぎぬ。

今大阪四近の地質を略説すると次の如くである。圖版第十一は昨年の暮に京都帝國大學地質學教室の學生が概測した結果を表はしたものである。**准片麻岩**は古期の水成岩から變成したもので生駒山の西側に狹帶をなして閃綠岩中に含まれて居る。**正片麻岩**は花崗岩が特に黑雲母の排列に依つて剝理を呈して居るもので、生駒山塊の一部を構成して居る。從來太古代に噴起したものとされては居るが又古生代以後の噴起に係るものだとも言はれて居る。**古生層**は粘板岩角岩砂岩石灰岩等の水成岩から成り最近の研究によると泥盆紀の堆積に係るものらしい。前記の大阪北方の山地卽ち南部西山山塊を成して、南方の三島邱陵から屈起して居る。**花崗岩**は生駒山塊の北部及西山山塊の南邊に露はれ後者では古生層を貫いて噴起して來る。**閃綠岩**は花崗岩に引續いて噴起したもので生駒山に露はれて居る。**石英粗面岩**は地面の西方に廣く出て居る、恐く中生代の後期に噴出した古期火山岩である。**安山岩**は地域の南東隅に衝り國分村の南方に露はれて居る。これは二上火山の一部を成すものである。以上の地質より成る部分は山地を成して直に人間活躍の舞臺となつて居らず寧ろ遊覽地として大阪平野の活氣ある人々を慰籍する地域を成して居る。

古期洪積層は礫砂、粘土より成つて從來第三紀層と見做されてゐたものであるが古期洪積世には日本全體を通じて多雨期があつて、其の爲めに當時の山地に近い低地には厚い礫層を作つたといふ見地から見れば正しく洪積層に屬するこの岩類は大部固結されて居り且つ後代の地殼變動を受けて局處的に地層が擾亂して居る。此の地層擾亂の事實から我々は高槻池田間の西國街道や大和川の南枝石川の溪谷卽ち富田林の谷が斷層線に當つて居て、地質時代には地震の震源を成したことを認知するのである。この古期

洪積層は大阪北方の三島邱陵、大阪の上町、北河内及南河内の一部を成し、其の邱陵地の溪谷は浸蝕が進んで居つて次の新期洪積層の臺地に比して、山らしい感じを與へる千里山の住宅地の如き其の一例である。新期洪積層も亦、礫、砂、粘土から出來ては居るが古期洪積層に比して軟かく、且つ此の地層は低き海拔五十米以内の臺地を成して居り、大和川以南では舊狹山川とも名づけべき舊時の河流の扇狀地を成して居る。崩積層、沖積層、埋立地は地史上の現代卽ち沖積世の生成物である。崩積層の山腹を被ふ崩壞岩土で生駒山の西麓に著しく、沖積層は平地を作る、埋立地のうち近世埋立地と稱したのは延寶七年(西曆一六七六年)以後の埋立地で、最近埋立地と名けたのは築港のそれである。此等の埋立地は天然の沈積作用と人力による埋立との二つの營力が併せ用はれて出來た新しい土地である。

大阪は瀨戸内海の隅角に位するのと其の附近に接して淀川下流及舊大和川の廣き沖積地があるのとで發達したのであるが、都としては沖積地の眞唯中にあるよりも邱陵が傍らにある事が便利であつた。それで古期洪積層より成る大阪臺地は初めの聚落の元をなした。西方の沖積地は段脈を增すと共に埋立や河渠を通ずるの必要が起きた。淀川でさへ下流の改修を餘儀なくされた天然は人力により段々に變へられてゆく、然し其の多くは低く且つ軟かい地質の沖積層及洪積層地に行はれた。古い岩石から出來た高い山の方は人力の影響を受けることが少なくて依然として生駒山は東の方に聳えて居る。生駒山塊の出來たのも三島邱陵の北方が急に高くなるのも地體斷裂の結果であつて古い時代を考へると大阪四近の平衍な土地が出來たのも其の原型は主に東西及南北に走る線で斷裂を起したのに起因し、其の後の地貌は河流の沈積作用で作られた。

三大都市中大阪現在の市街地の發達するまで取つた過程を考ふるに、京都の如く千餘年前に都市計畫を建てた政治上の要因に全然支配され

たものに比して頗る趣を異にしゐるのは勿論である。又た東京の如く鎌倉幕府が興つた後にもなほ大都會の心核たるべき地點は容易に發達せず、治承年間に漸く江戸郷の名が記載されたのに止るものに比して、早くから大和河内の中央政府の海陸交通の要津となり奈良朝以前から既に行宮や離宮があつて、外客接待の鴻廬館の設けられた點に於て同じく趣を異にし、兩都市よりも遙かに古くから大都市として發達すべき資格を具備してゐた譯である。京都は遷都以後發達が遲々たるに反し、大阪が豊臣氏が沒落しても依然として日本全體の經濟上の中心たるを失はずして、明治以後に海運交通の新機關の發達するに伴つて東亜の倫敦たるの盛況を呈してゐるのは主として其の瀬戸内海の東端に位し、近畿の最も古くから開けた地方を控えた地理的位置の關係が然らしめたのである。

而かも聚落から市街地の形に發達した過程を知らんとするに當つて最も困難と感ずるのは、大河流の合流して海に入る三角州地區なるが爲めに地形の變化が非常に迅速に進行し、之に加ふるに人工の排疏事業で河道の大移動を起し、歴史上の聚落が今は全く在昔の地理的環境を異にしてしまつたことである。其の最も著明なのは明治に入つてからの築港に先ち天保山に名殘を留めた安治川口の改修と寶永元年の新大和川の開掘によつて北流して淀川に合したものを西に導いて堺市の北へ流したことゝである。特に後者は現在の地圖によつて堺市の古い貿易港としての成立を論ずるに當つて河口に發達した好例とせば飛んだ誤謬に陷るから、知れ切つた譯ではあるが大に注意せねばならぬ。

今の大阪市街地の東區船場渡邊橋(大江橋)の附近が洪積層の臺地の西の海に面する所で古く聚落が出來て此處が難波津となり、國府が延暦年間に此處に移されたといふも、其の變遷は殆ど知れぬ。之に反して遙かに古く成立つて存續し來つたのは天王寺が創建さるゝ際に材木を運漕し來つた木津であつたらうと想はれる。元木津がそれであつた。三角洲が其の後に附加はつ

て今の木津河口まで延びたので冲積作用の著大なることが推測される。此の天王寺と木津の位置が當時は現在に比して頗る重要であつたことは臺地東側の舊大和川の河末が久しく沮洳地を成し、五米の等高線が深く平野郷の北まで入り込んでゐて、天王寺から平野郷八尾瓢簞山の邊を連ねた曲線以北は海灣中に三角洲が生長して行つて作りつゝあつたと想はるゝので推測せらる。當時大和川の派流の冲積作用は此の五米等高線を辿れば明かである。此の結果は難波津から平野郷道明等(國府)を經て大和に通ずるのが交通の幹線として最も重要であつた譯である。

平安朝の初期までに此の土地が今大阪軌道の奈良線附近まで聚落の成立を許す地區となつたらしく、此處にも奈良平野の班田の行はれ條里制の下に出來た村落と同じ形式の我々の所謂垣内(カイト)式村落が點々あつて周邊の一都部は四條五條等の地名が殘つてゐる。然れども其の北では河内北部の平野に和名抄郷名の部に見えた村落は殆んど全く一直線に生駒地壘の西麓に沿ひ枚方柏原を連ねた高野街道の上に點々相望んで看出されるに止る。是から考ふれば平安朝の村落は淀川大和川の合流する攝東河北の洪涵地を避けて、地圖上に示さるゝ溪流の低平地に流れ出た扇狀冲積地を擇み、其の溪流の末を堰き止めて朝鮮の洑の如き溜池を作つて之を灌漑用水として五十戸を超えぬ聚落を支ふる稻田を耕作したものであつたらう。此の如き溜池の一つは四條縄手に楠公墓から北二粁の駒池で、是は高麗人の作つたものたることが明かで、其の北の太秦(ウズマサ)(ダ)秦の聚落も亦た同じく歸化人が溜池を作つて開いたものと想はれる。

當時の淀川に小さい船は橋本(男山八幡の下)まで通じたことは貫之の土佐日記に記載した通りであつたが、大船は多分江口守口の邊で止つて、此處は奈良朝から興つて平安朝の間に河口港として發達したのである。其後鎌倉幕府の時代を經て南北朝の頃に至るまでも、江口は淀川河口の重要な一小都會を成してゐたらしく、南朝正平二年の年號を打つた刀鍛冶來國長は江口

の中島に住して中島來と呼ばれてゐる。此の頃は天王寺と此處とが稍著しい處で、天王寺にも吉氏といふ刀鍛冶がゐたし、又厦南北軍の爭奪の目標ともなつてゐる。

然れども南北朝時代に最も重要な處は堺浦で吉野朝廷が東に伊勢大湊、西に泉州堺浦を持てば東西に向つて交通することが出來るが、堺浦を失へば此の特に必要な西の門戸が閉塞されるのであつた。故に延元三年北畠顯家が高師直を此處に攻めて戰死したのは南朝の一大打擊であつた。爾來大内細川三好などの室町幕府の實權を握るものが常に此處を根據地とし、且つ遣明船の出發點となつた織豐兩氏の時には既に般富近畿第一の埠頭に發展してゐたのである。

大阪の市街は豐太閤の築城によつて現在の堀川の格子狀に交つて無數の橋梁を架した一大水都となつて、其要部は京都に類似した東西南北の街衢を通ずるものとなつたのである。然れども此の市街地の心核となつたのは明應五年に本願寺連如上人が臺地の北端の生玉莊大阪に寺院を興し之を築城した石山寺であつた。一向門徒の集ると共に門前町が此處に出來てゐて、其の大阪といふ地名が此の時に始まつたのみでなかつた。卽ち寺院の勢力の下に大聚落が出來た一例であつたのが、太閤海内統一の權力の中心となつて一躍して日本最大の都市になつた譯である。此の天正頃の大阪の市街地は如何なるものであつたかを想像し得ぬが、當時の形式は矢張り大體平野鄕などの如き垣内式聚落で、以前から多少東西南北の格子狀を成して居たらうと想はれる。

之を要するに大阪の都市としての成立に對しての第一要因は淀川の河港であつて瀨戸内海を控制する地理的位置に在るが、第二は天王寺石山寺が建てられた邱陵が北に延びて此の河口を扼制する形勢の位置であつて、古代近世の門前町たる小都會が日本全體を通じて最も大きい經濟上の中心たる大都市に發達したものである。

（小川と中村）